氏　　名　杉村和彦（すぎむら かずひこ）

学位(専攻分野)　博　士（農　学）
学位記番号　論農博第2459号
学位授与の日付　平成15年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　赤道アフリカ農民経済の組織原理に関する研究

論文調査委員　（主査）教授 祖田　修　教授 辻井　博　教授 掛谷　誠

論文内容の要旨

本論文は，長期の現地調査に基づく実証研究を通して，ゴラン＝ハイデンによって提起された，“情の経済”というアフリカ小農の独自のモラル・エコノミーの存在様式とアフリカの資本主義の様態との連関を比較農民経済論という立場から再検討し，その慣習経済の文化的特質を再定式化したものである。

第1章においては，本論文の課題を明らかにするとともに，本論文の方法的視角としての「農民経済の組織原理」という事柄の意味内容を，経済学における制度学派のヴェブレン，社会学のブルデュー，文化人類学のギアツ，哲学者の三木などの議論との連関で検討している。

第2章では，アフリカの農村経済の動態を内部から見る視座を，ハイデンを中心に展開された＜アフリカ小農論争＞における議論を中心に，アフリカ農民のユニークネスに関わる論点，経済人類学上のアフリカ農民経済研究の位置，モラル・エコノミー論などの視点から検討している。

第3章は，本論文の中心的な事例となる，アフリカの熱帯多雨林下のザイール中流域に林立する，焼畑に依存して生きる，小エスニック・グループの歴史的展開とその特質を，その周辺に展開する，首長制，あるいは王政を成立させたサバンナ地域の農村と対比しつつ論じている。

第4章では，ザイール中流域の焼畑農村を構成するエスニック・グループの一つとしてクム社会を取り上げ，その村落社会の組織原理を4つの視点，すなわち広域的な地域社会と村落組織の関係，「共食」慣行を支える集団であるトアの社会経済的機能，生活集団としてのトアの社会経済的な構造と特質，クム社会の村落の内部組織の中心を作り出すトアの組織原理，から検討している。

第5章では，商品経済とキサンガニ周辺の焼畑農村間の関係の具体的な様態を都市―農村関係を軸として都市であるキサンガニと地域中心の関係，地域中心とその背域の関係という二つの視点から検討する。とりわけ本章では，商品経済化を押し進める主体としての商業資本と焼畑農村を構成するエスニック・グループ間の乖離した状況が，事例分析されている。

第6章では，焼畑農村の商品化の様態を，クム社会の生業の組織原理と変化の位相を通して明らかにしている。クム社会における多生業複合のあり方とその変化の次元を農民経済の重層構造との連関で主題化し，とりわけこの重層構造に関しては，世帯とトア（共食集団）の商品化をめぐる社会経済的役割の差異に焦点を当て，商品化の進展にもかかわらず再生産される，伝統的組織のあり様とその意味を検討した。

第7章では，クム人の焼畑農耕の「生存維持性」の様態とその文化的特質に焦点をあて，混作という技術的特質と経営形態の構造的特質を中心として検討を加える。前者に関しては，単作の技術との比較でその技術をめぐる価値意識に内在してその組織原理を明らかにしている。また，後者の経営形態の重層性に関しては，世帯を越えたトア（「共食」集団）のレベルで行われる休閑期間の選択に焦点を当て，トアによって動かされる焼畑経営の基本的性格を明らかにしている。

第8章では，商品経済化の中で差異化される，世帯の経済の動向に焦点を当て，クム社会の内部でのランキングシステムを農民自身の評定と主要な財との関係から一つの傾向性としてとらえた上で，さらに日常的な生活世界での「富者」である

こと「貧者」であること，さらには，その関係性の様態の具体像を明らかにした。そしてこのような検討を通して，「階層現象」の中に内在化された農民の価値的世界の様態と多層なかたちで変化する平準化システムの動態のありようを農民世界の内部から具体的に明らかにし，農村内部での世帯間の関係性の組替えと再編の方向を示している。

第９章では，クム農民の消費の構造の特質論を農民経済の組織原理との連関で再検討している。とりわけ現金経済が流入する中での世帯経済の変容のあり方と現金利用の中に見られるモラル・エコノミーの様態を主題化し，現金の必要にかかわって引き起こされる農民の今日的「困難」のあり方とその次元を類別するとともにそれに対処する共同性のあり方を検討している。

第10章では，以上の事例研究を踏まえて，アフリカ小農論争をアフリカ農民経済の組織原理という視角から捉え直し，以下の三つの論点について再検討を試みる。第１点はキサンガニ小農の動態の固有のありようから「小農論争」を再検討する。第２点はアフリカ農民経済の組織原理をクムの「共食」集団の編成原理を軸に比較農民経済という視点から再検討する事である。第３点はアフリカ農民経済の組織原理を「消費の共同性」というところから位置づけ直し，アフリカ農村経済の動態の特性との連関を考察している。

第11章では，アフリカ農村における農民経済研究の文明史的意味とその視角，さらにはその可能性を中心に，本研究における成果を位置づけ締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，アフリカ農村社会を長年にわたって現地調査し続けてきた著者が，特に熱帯多雨林地域コンゴ民主共和国（旧ザイール）を中心にした，焼畑小農民経済社会の特質を克明に描き出し，独自の論理構成をもって説明したものである。

特にその特質を，多生業構造を持つ農業，および「分与の経済」に支えられた日常生活様式と捉え，その地域に卓越する「混作，共食，山羊」という象徴的・具体的な事柄を通して，原理的に「アフリカ社会のユニークネス」として提示したものである。

評価すべき点は次のとおりである。

1　アフリカ社会を，長期にわたりかつ徹底的に現地調査し，その社会を内面より理解し，そのユニークネスを描き出した量・質ともに充実したオリジナリティーの高い研究である。

2　アフリカ小農民経済をめぐる論争を十分検討し，その上に立って，独自の見解を明確にしたものである。

3　ザイール中流域のクム社会について，共に分け合い，食べるという「共食」の意味，それを支えるトアという組織集団の機能について検討し，アフリカ農村の共同性の基本的契機について解明した。

4　キサンガニ周辺の比較的商品経済化の進んだ村と，焼き畑農村の比較検討の中から，両者の差異を明らかにするとともに，社会変動にもかかわらず維持・再生産されている伝統的組織の在り様と意味を明確にした。

5　クム社会の構造について，「混作」という生存維持的農業形態，いわゆる貧富の平準化作用をもたらす「共食」集団としてのトア組織，にもかかわらず独自の富を表現する「山羊」の持つ意味等の検討から，当該小農民社会の本質を，多生業構造に支えられた農業と，分与の経済に支えられた生活との結合として描き出し，その変化の方向を示した。

以上のように，本論文はアフリカ小農民社会の本質，およびその変化の様相と意味について，克明かつ明快な理論的分析を行ったものであり，アフリカ地域研究，農業経済学，農村社会学，文化人類学等の発展に寄与するところが大きい。

よって，本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお，平成14年12月18日，論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果，博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。